

絵本から発展させる遊び

伊東 久実

はじめに

2001年に開始されたわが国のブックスタート事業は、2012年には全国の市区町村の46%にあたる806市町村で実施されるまでに拡大した¹⁾。ブックスタートは、その地域に生まれたすべての乳児と保護者を対象に、まずは乳児と共に絵本を開く楽しさを体験してもらい、さらに、絵本の入った「ブックスタート・バック」を手渡す活動である。ブックスタートは、絵本の配布だけでなく、子どもの成長に合わせた絵本との豊かな出会い、また、地域に見守られて安心して子育てができる環境作りを重要なフォローアップ活動として推進する。その結果、各地域の図書館では、読み聞かせ会が年々盛んに催されるようになった。

ブックスタート開始から10年が経過した現在、成長する子どもたちのニーズに応じた読み聞かせ会の開催をめざして、会の内容の一層の充実が求められている。子どもの読書推進運動が盛んな海外の図書館における読み聞かせ会では、ストーリーテリングや絵本の読み聞かせに加えて、指人形劇、創作劇、クラフト、歌、ゲームなど多彩な活動が行われている。「活動を通してより作品を深く理解させ、子どもたちの想像力を豊かに伸ばし」（桂、1997：77-79）、リテラシーの向上を図り、さらには地域における子どもと親の活動場所を提供することが目的である。そこでは、絵本の読み聞かせと絵本から発展させる遊びを行い、楽しさを基盤に次の読書へと進ませている。

では、絵本から発展させる遊びはどのように企画し実践されるのだろうか。そして、こうした活動は子どもの読書活動にいかなる影響を与えるのだろうか。中川（2003：2-3）は、小学生を対象とした絵本の効用として、子どもたちが生き生きと教科の勉強に打ち込む方法、自己を内省し新しい力を獲得させる方法、教師と児童の間でコミュニケーションを促進する方法を具体的に述べている。また、塚原（2011：153-159）は「図書館における科学遊びの会」について、さらに内藤（2011：159-160）は「図書館子ども会」の実施方法を記している。しかし、乳幼児の読み聞かせ会で用いられる絵本から発展させる遊びについての具体案は提案されていない。

本論では、まず絵本から発展させる遊びを日常の保育で実践した千葉県茂原市にある東郷保育所の実践例を示す。次に、読み聞かせ会で用いられるために創作した絵本から発展させる遊びを提案する。

1. 保育所における、絵本から発展させる遊びの実践

東郷保育所は、平成16年度に千葉県からの委託研究としてブックスタートの趣旨を保育に採り入れ、「子ども、保護者、保育者の三者が共に育つ保育」をテーマに掲げて研究に着手した²⁾。これを記した研究報告書「1、2歳児の現状と、保育・子育て支援のあり方—共に育つ保育—」を、絵本、子ども、遊びの3つの視点から整理する。年間指導計画の1期から4期の中で、特にこの3点が顕著に示されている1期から3期まで（4～12月）を考察する。

1.1 絵本から発展させる遊びの実践例

保育者は、「絵本やわらべうたに対する子どもたちの興味を遊びに広げ、楽しい活動を展開する」というねらいの下に、絵本から発展させる遊びを行った。その実践例を、研究報告書「1、2歳児の現状と、保育・子育て支援のあり方—共に育つ保育—」に基づき、筆者が表1にまとめた。

(1)表1

絵本名	遊びの進め方と保育者の援助
『いないいないばあ』 (松谷みよ子作)	・絵本を見ながら、一緒にいないいないばあをしたり、間食の後などおしぼりを使って保育士がいないいないばあをした。 ・パペットを使い子どもたちに見せ、ダンボール箱やダンボールの家の窓から、いないいないばあをして遊んだ。
『きんぎょがにげた』 (五味太郎作)	・遊びの中で自由に絵本を開けるようにし、絵本の中の金魚と一緒に探して楽しむことから進めた。 ・プール遊びが始まったので、おもちゃの金魚を作ってプール遊びの中に取り入れたり、室内で金魚探しごっこをして遊んだ。
『のせてのせて』 (松谷みよ子作)	・間食後の絵本の時間に繰り返し絵本を読む。子どもたちが楽しんで見られるようになったので、箱を車に見立てたごっこ遊びに進んだ。布をトンネルに見立ててくぐって遊んだり、箱の中にぬいぐるみを乗せて自分が箱に入って車の運転を真似て遊ぶ姿が見られた。
『ぞうくんのさんぽ』 (なかのひろたか／ なかのまさたか作)	・間食後の絵本の時間に繰り返し絵本を読む。動物の理解ができるように歌ったり、動物の真似（表現）をしたりして進めた。積み木遊びをしながら、「大きいからぞうさんね」、「小さいからカメさんね」と言葉かけをした。

子どもが本を差し出して読んでもらうことを催促する行動が見られるようになった絵本を中心に、段ボール箱やペットボトルのふたを利用した手作り玩具や、子どもたちが日常的に親しんでいる遊具を用いて遊びを展開している。この実践を通して保育者が明らかにした点は、「絵

本には色々なジャンル、内容があり、遊びに結びつく絵本と遊びには向かない絵本がある。好奇心を刺激する活動的な内容の絵本が遊び向きのように思う」である。

ここから明らかになるのは、絵本に対して子どもが興味を示すタイミングを見逃さないように、即時に身近な用具を使って彼らの遊びを継続・発展させることが重要だということである。これを可能にするためには、保育者は絵本に対する子どもたちの興味関心の所在を観察し、どのような環境構成ならば月齢の低い子どもたちにも絵本と遊びの関連を理解させられるのかを日頃の生活や遊びに基づいて思考することが求められる。

1.2.1 年間指導計画に基づく1期（4・5月）の活動

1期は、在園児4名、新園児11名でスタートした。保育者はこの時期、一人ひとりの子どもが新しい環境に慣れ、安定して登所することを最優先している。その一手段として、わらべうた、手遊び、絵本を用いて、保育者と子どもの密接な関係作りが試みられた。「ちょちょちあわわ」や「げんこつ山のためきさん」などのわらべうたや手遊びをしながら個々の子どもとのスキンシップが図られた。さらに、子どもたちにとって身近な題材を扱った絵本を選択し、例えば絵本「くだもの」では手に取り食べるしぐさを楽しみながら読む工夫が絵本の時間の中でなされた。また、子どもが個々に読み聞かせを要求した場合は、一対一で丁寧に語りかけながら読み聞かせた。あるいは、クラス共通の興味を持たせるために、保育者が選んだ絵本を数人のグループごとに読み聞かせた。こうした中で、子どもたちは新学期の不安を感じて泣きながらも絵本に対して興味や親しみをもち始め、好きな絵本の読み聞かせを繰り返し保育者に求めるようになっていった。

以上から、絵本の読み聞かせだけでなく、絵本から発展させる遊び、手遊び、わらべうたは、子どもと保育者の間のスキンシップを促進し、両者の信頼関係作りに大きく貢献することがうかがえる。信頼関係ができ始めると、子どもたちは絵本の読み聞かせを一層求めるようになった。

1.2.2 2期（6・7・8月）の活動

2期には、0歳児4名が入所し19名になった。子どもたちは保育所の生活に慣れ、言葉も上達し、絵本を見ながら保育者の真似をして言葉やしぐさを楽しむようになった。絵本へ興味を示す子どもが増えて読み聞かせを楽しむ様子が見られるようになった時点で、保育者は絵本のストーリーに添った遊びを展開させていった。「きんぎょがにげた」からはペットボトルのふたで作った手作り金魚を用意してプールあそびに取り入れ、室内の壁には金魚捜しの遊びが行える壁面構成を施した。「のせてのせて」からはダンボール箱を車に見立てて、ぬいぐるみを乗せたごっこ遊びや、さらに布をトンネルにみたててくぐる遊びへと発展させていった。

以上のように、保育者は子どもたちがより絵本に親しめるように、絵本のストーリーを遊びとして展開できる環境構成を行った。保育者の想像力によって、1冊の絵本からでもそのストーリーに関連させる遊びを多様に展開することは可能だ。この活動を通して保育者は、「月齢の高い子は遊びに対する反応もありストーリーを理解しているように思えた。その反面月齢の低い子は月齢の高い子の真似をして楽しんでしたが、絵本とのつながりはまだ理解されていないように思えた」と考察している。この実践における月齢の高い子は1歳10か月前後、低い子は1歳前後である。

1. 2. 3 3期（9・10・11・12月）の活動

2期で行った絵本から発展させる遊びによって、3期になると子どもたちは保育者との信頼関係をより強め、自ら選んだ絵本を一人で見たり、「読んで」と保育者に差し出したりする子どもが少しずつ増えてきた。彼らが保育者や絵本と関わりを深めていく中で、保育者は、絵本を通して親子のコミュニケーションを取る機会の設定を試みた。保育所で見ている絵本を家庭でも楽しめるように貸し出しコーナーを作り、運動会では競技内容に子どもたちが楽しんでる絵本とわらべうたを取り入れ、保育参観では子どもたちのお気に入りの絵本から発展させたごっこ遊びを行い、絵本を介する子ども、親、保育者の三者間の交流を推進した。

日々の読み聞かせや、絵本から発展させた遊びを通して絵本への親しみを日常的に体験した子どもたちは、貸し出しが始まると積極的に絵本を借りて行った。子どもは、家庭において親との読み合いの時間を新たに得た。多くの母親は、読み聞かせのために時間を割くように努めた。この取り組みを始めてから9か月後の平成17年1月に行った保護者に対するアンケート調査には、「子どもの方から読んで欲しいと催促される事が多くなり読み聞かせの時間が急激に増えました。母親の手が家事等で空いていない時は、自然と父親の方へ本を持って行き読んでもらってます。父親も子どもの反応が良いので一生懸命読み聞かせをするようになりました。」などの回答が寄せられた。

さらに、以下に示す母親の回答からは、絵本から発展した子どもと保育者の遊びが家庭においても伝搬され、子どもが親たちに読み合いを求める様子が伝わってくる。

【おおきなかぶ】の本を寝る前に読み聞かせました。さすがに保育所で練習済み（笑）のかけ声は上手にできて本人も少々興奮気味!! 寝付けなかなあと思いましたがさすがに4、5回続けて読んだので、いつも通りにzzzでした。しかし!!!早朝、じいちゃんじいちゃん、またこの本をよんでと催促されました。

【おおきなかぶ】をかけ声高らかに楽しむ読み方（保育者がかぶになり、子どもたちがみんな

などで力を合わせて抜くというごっこ遊びである。絵本の登場人物を子ども達の名前に変えて一人ずつ呼び「うんとこしょ！ どっこいしょ！」とかけ声をかける）は、日常の保育の中で保育者と子どもが楽しんできた絵本の読み合い方である。これは、絵本から発展した遊びの一つで、保育者、子ども、さらには親が、互いに共通の体験と言葉を持ち、絵本をもっと読みたいという子どもの気持ちが進められていく様子がわかる。絵本の読み聞かせに加えて、絵本から広がる楽しい遊びを積極的に取り入れることによって、子どもたちの絵本に対する興味関心が一段と喚起されていく様子がうかがえる。

2. 絵本から発展させる遊びの提案

東郷保育所の実践からは、絵本の読み聞かせに加えて絵本から発展させた遊びを積極的に取り入れることによって、子どもたちの絵本に対する興味関心が一段と喚起されていくことが明らかになった。本章では、保育所等で日常的に取り入れられている造形遊びをヒントに、筆者が絵本から発展させる遊びとして創作した活動を提案する。各地の図書館で開催される読み聞かせ会で手軽に実践できる活動であると思われる。

2.1 実践例

2.1.1 野菜スタンプのワンピース作り — 『わたしのワンピース』（絵と文／にしまきかよこ）から—

1) あらすじ

ワンピースを作ったうさぎが、それを着てお花畑を散歩すると、ワンピースが花模様になった。雨の中を散歩すると水玉模様になった。草原、空、様々な場所を散歩すると…、ワンピースの模様が次々に変わっていく。

2) 活動の対象年齢：親子での場合は2～3歳以上、子どもみの場合は3歳～4歳以上。

3) 準備するもの：幼児の上半身のサイズでワンピース型あるいはTシャツ型に切り取った画用紙、スタンプング用水彩絵の具4、5色、皿、カット綿、野菜（オクラ、ピーマン、れんこん、なすなど）

4) 遊び方

- ① 子どもと大人が、「私だったら何色で、どんな模様のTシャツを着たいかな」と、用意した絵の具を前にゆっくりとイメージを語り合う。
- ② 幼児の上半身のサイズに切り取ったワンピース型あるいはTシャツ型の画用紙に、野菜の切り口の形を利用したスタンプングで模様を作っていく。
- ③ イメージにより近くなるように、クレヨンで書き足す。2枚作って洋服の前後に安全ピンで留め、ファッションショーをする。



写真1 野菜のスタンピングの材料と切り口を利用して模様が施されたワンピース

2.1.2 ゆかいな住人作り — 『100かいだてのいえ』（絵と文／岩井 俊雄）から—

1) あらすじ

「あそびにきてください」という手紙をもらったトチ少年が地図を見ながら歩いていくと、突然100階建ての家が現れる。トチ少年は、霞んで見えないほど高い100階まで登り始めると、そこにはネズミやカエルやクモの王子様などのゆかいな住人がいた。

2) 活動の対象年齢：親子での場合は3歳以上、子どもだけの場合は小学生以上

3) 準備するもの：紙コップ、雨傘用ポリ袋、曲がるストロー、セロテープ、油性マジックなど

4) 遊び方

- ① 「100かいだての家にだれが住んでいたら楽しいかな?」「何があったらうれしいかな?」と子どもと大人で話をする。
- ② 雨傘用ポリ袋の下部を上にし、油性マジックで住人やあったら嬉しいものを話し合いながら順次下に向かって書き加えていく。
- ③ ②の口に曲がるストローをさしこみ、空気が漏れないようにセロテープで巻く。
- ④ ③を紙コップの中に入れ、コップの底に一か所穴を開けてストローの吹き口を出す。
- ⑤ 息を吹き込むと、絵を書いた雨傘用ポリ袋がよろよろと膨れ上がっていく。

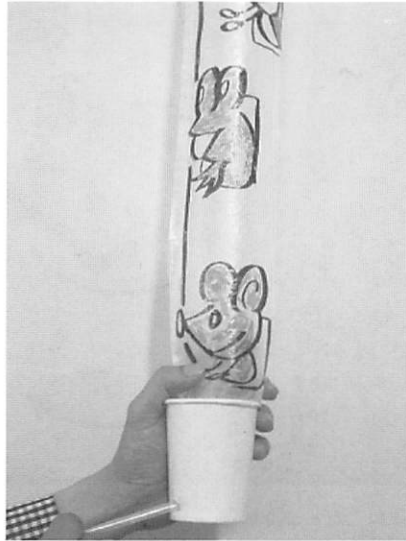


写真2 紙コップにストローを接着した雨傘用ポリ袋を差し込む

2. 1. 3 ぱちんガエル作り — 『びよーん』(絵と文/まつおか たつひで) から—

(1) あらすじ

びよーんと跳ねるかえる、犬、ぱった、にわとりとひよこの親子。さまざまな生き物がびよーん、びよよーんと飛び跳ねる。

(2) 対象年齢：親子での場合3歳以上、子どもだけの場合年長児以上

(3) 準備するもの

牛乳パック、油性マジック、セロテープ、輪ゴムなど

(4) 遊び方

- ② 正方形に切り取った牛乳パック2枚の中に自由に絵を書いたり、色付けしたりする。
- ③ 2枚の正方形にそれぞれ切り込みを入れツメの部分を作り、セロテープで張り合わせる。
- ④ 手を放すと、ぱちんと飛び跳ねるように輪ゴムを1回ひねりツメにかける。

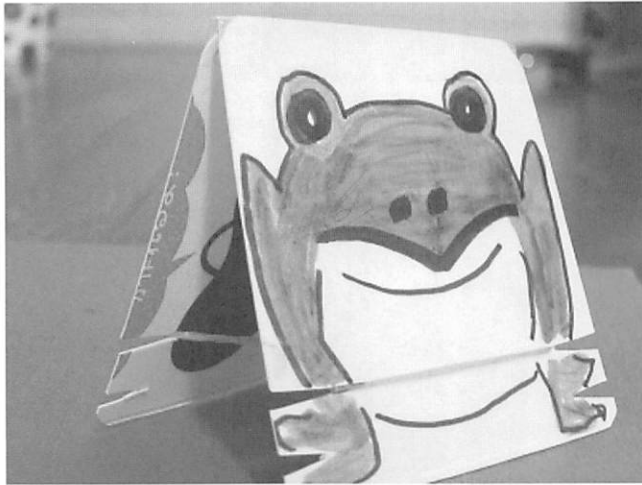


写真3 跳ね上がるように輪ゴムは1回ひねりツメにかける

2.2 実践例への反応

2.1で提案した絵本から発展させる遊びを、14人の図書館員と共に実施する機会を得た。実施後に図書館員の反応を得るためにアンケート調査を行い、以下の結果を得た。

問1「子どもたちは、今日紹介した活動を喜んでくれると思いますか。」

- ・とても喜んでくれると思う (93%)

問2「特にどの活動が印象に残りましたか。」

- ・すべて (64%)
- ・わたしのワンピース作り (14%)

問3「今日紹介した活動を実際にやってみようと思いますか。」

- ・思う (100%)

問4「このような研修を受ける機会がありますか。」

- ・時々ある (29%)
- ・ある (28%)
- ・ない (43%)

問5「このような研修の機会がもっと増えればよいと思いますか。」

- ・はい (86%)
- ・どちらともいえない (14%)

問6「今行っている読み聞かせ会の活動にやりがいを感じていますか。」

- ・感じている (79%)
- ・特に感じない (21%)

以上から、絵本から発展させる遊びを体験した14名の図書館員の多くは、これらを有効な活動と評価し、実際に読み聞かせ会に取り入れる意欲が高いことがわかる。

おわりに

東郷保育所での保育実践から明らかにされたように、絵本から発展させる遊びを積極的に取り入れることによって、絵本に対する興味が喚起されて絵本と子どもたちの持続的な関係が可能になった。これまでの読み聞かせ会では、大人から子どもへの読み聞かせという一方的な活動が中心になりがちであった。今後、より充実した豊かな内容をめざす時、絵本から発展させる遊びを取り入れて図書館員と子どもたちの共同作業の機会を設定することは、一つの有効な方法であると考えられる。今回は、図書館員との実践に留まり、子どもを対象にした活動を行って彼らの反応を得ることはできなかった。次回への課題とする。

注

- 1) NPOブックスタート『ブックスタート・ハンドブック第6版』2012 p.14
- 2) 研究報告書「1、2歳児の現状と保育・子育てで支援のあり方—共に育つ保育—」によると、研究対象者は0～1歳児15名、研究方法は、(1)保護者に対するアンケート調査で、①茂原市で行うブックスタート事業を知っているか否か、②わらべうたや絵本に対してどう思っているかを問う（平成16年4月）。(2)アンケート調査の結果を参考に年間指導計画を作成し、保育実践を記録しながら家庭との連携を深め、子ども、保護者、保育士の心理的变化を考察する。(3)保護者を対象にアンケート調査を行い、わらべうたや絵本を介することで子育てが楽しいと思えるようになったかを問う（平成17年1月）。なお、筆者は研究報告書の閲覧とともに、施設長へのインタビューも行った。

参考文献

- 桂宥子『理想の児童図書館を求めて—トロントの「少年少女の家」』1997、中公新書
- 塚原博「科学あそびと科学あそびの会」、日本図書館協会児童青少年委員会・児童図書館サービス委員会編『児童図書サービス1—運営・サービス論』2011、日本図書館協会
- 内藤直子「図書館子ども会」日本図書館協会児童青少年委員会・児童図書館サービス委員会編『児童図書サービス1—運営・サービス論』2011、日本図書館協会
- 中川素子「まえがき」、中川素子編、文教大学絵本と教育を考える会著『絵本でひろがる楽しい授業』2003、明治図書
- NPOブックスタート編『赤ちゃんと絵本をひらいたら—ブックスタートの10年』2010、岩波書店